

「さあ、出かけて行こう」

ヨハネによる福音書 15章16節

聖学院大学 政治経済学科教授 瀬名 浩一

ヨハネの福音書15章16節には「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」とあります。この聖句は私に、この1年間を振り返るよいきっかけとなると同時に、キリスト者として目指したことが実を結ぶとはどういうことかを考える機会ともなりました。

2ヶ月ほど前のことですが、ゼミの5人の学生たちを連れて隣町の高校を訪問しました。高校2年生7人と彼らが実践している自転車免許制度について語り合うためです。語り合いは約1時間、初めての出会いにしては高校生たちが自ら進んで交通違反の状況を話してくれたり違反内容が書かれた免許証を見せてくれるなど結構打ち解けた雰囲気になりました。大学生たちも高校生たちの想いを引き出すべく様々な角度から質問し、語り合いを盛り立てていました。帰りの昼食の席では、参加した大学生全員、自分たちが準備してきたことが「実を結んだ」喜びに満たされている様子でした。

実は、この語り合いが実現するまでには、学生たちは夏休みを挟んで半年近くの準備を重ねました。準備のひとつ目は、大学と上尾市役所および上尾警察署など外部機関とつながること、ふたつ目は、大学生たちと高校生たちがつながることでした。

大学が立地する上尾市は、2年半前、「自転車のまちづくり協議会」を組織し、今年度から始まる10カ年計画をまとめました。上尾市の計画では、高校生を含む若い年齢層(24歳まで)が加害者となる自転車事故が他の年齢層に比べ最も多い状況を踏まえて、自転車の交通ルールやマナーアップの向上などを大学と協働して行うことになっています。

ところが秋学期になっても予定したワークショップの相手となる高校を上尾市内で見つけられませんでした。結局、同じ警察署の管内にあり既に自転車免許制度を実施している隣町の高校を上尾警察署に紹介してもらうことになりました。次に語り合う具体的な相手を選ばなければなりません。学生たちが選んだのは、高校側の交渉窓口に当たった先生が指導されている自転車競走部の高校生ではなく、問題意識を共有する普通の高校生でした。

また、つながりをつけた高校との語りあいの時間についても、何度もやり取りをした結果ようやく土曜日の放課後ということで決まりました。こうしてこぎつけた大学生と高校生との語り場には、上尾市役所のスタッフも同席してくれることになり、来年度以降の企画にもつながるなど「実が残る」可能性も出てきたのです。

このように学生たちが当初意図した内容を生かしながら「自転車免許制度の有効性に関する大学生と高校生の語り場」は実現したのでした。

改めてヨハネによる福音書15章16節を読むと、イエス様は、なぜ、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」「わたしがあなたがたを任命したのである」と弟子たちに語りかけたのでしょうか？

私には、弟子たちが、出かけていくための客観的な条件はまだ整っていないと、いつもの私たち同様、口実を設けて、なかなか出かけて行かなかったのではないかと想像されます。「出かけていく」という言葉は、15章では文章の途中で呼びかけとなっていますが、前の章の結びでも、「わたしが父を愛し、父がお命じになった通りに行っていることを、世は知るべきである。さあ、立て。ここから出かけよう。」と、弟子たちはイエス様に呼びかけられています。

何故何度も呼びかけは続いたのでしょうか。それを解くカギは、続く15章17節でイエス様が語った「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」という御言葉にあるように思います。それまで「あなたがたを選んだ」「あなたがたを任命した」と言われても反応しなかった弟子たち、イエス様から「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である」(14節)「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない」(15節)と言われていた弟子たちは、イエス様からの「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」との17節の御言葉を聞いて、さすがに目覚めたのではないのでしょうか？この御言葉こそイエス様から弟子たちへのいわば最後通牒だったのではないのでしょうか？

先ほど述べた「実を結ぶ」という言葉については、ヨハネの福音書15章4節で「わたしにつながっていないなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が木につながっていないければ、実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ実を結ぶことができない」と語られています。弟子たちが出かけて行って実を結ぶことができるのは、自分たちを愛してくださるイエス様と自分たちがつながっているからなのだと思える箇所です。

私自身イエス様とつながり実を結ぶということはどういうことかを振り返ってみました。今年は私にとって、教会で洗礼を受けて20年という節目の年ですが、最初の6年間は、大学の教員になるための準備期間でした。そのあと聖学院大学の教員になってからの14年間は、教育と研究に携わることができ、愛すべき学生たちに奨励する機会も与えられました。また大学からは半年の特別研究期間もいただきました。所属する教会では社会委員として活動する傍ら、関係先の社会福祉法人の監事を務めました。それらは皆イエス様とつながることにより実を結んだ果実だと思います。

冒頭、ゼミの学生たちと「大学生と高校生の語り場」を創ったという話をしました。この半年近く私も学生たちと共に、次々と起こる課題を一つ一つ解決しながら語り場づくりに邁進、その結果、高校生たちとの良き交わりの場が実現しました。

語り場を創るという活動は、学生たちと高校生たち、学生たちと上尾市、上尾警察署などの関係者とのつながりを通して学生たちと私自身のつながりを見つめ直す貴重な機会を与えてくれました。そしてそのことを通して、あのぶどうの木のとえのようにイエス様と自分たちとがつながっていることを実感することができました。

私は、この3月、聖学院大学を退任します。聖学院大学に奉職して14年間、学生たちと十分つながっていたのだろうか、さまざまな悩みや困難な状況にあった学生たちの力になることが出来たのだ

ろうかと自問せざるを得ません。

2015年、新しい年が始まりました。互いに愛し合いなさいとの御言葉に応えて、ここから出かけて行きましょう。

お祈り

主イエス・キリストの父なる神さま！

14年間の聖学院大学における教員生活を送ることができましたことを感謝します。そしてその間、学生たちへの奨励を1回も欠かさず続けることができたことを感謝します。ただ、学生たちに互いに愛し合いなさいと言いつつ、自らを振り返って、御言葉を十分受け止められなかった私の罪をお許し下さい。どうか学生一人一人があなたの御言葉を学び、あなたの愛に目覚めるようお導きください。

アーメン

2015年1月13日 聖学院大学 全学礼拝